

福島事故を体験した日本の使命 原子力技術者魂を奮い起こせ!

WIN-Japan 小川順子会長に聞く (東京都大学准教授女性研究者支援室長・原子力学会広報情報委員長)

(聞き手) 本社社長 堀越雅明

——WIN (Women in Nuclear) は、原子力・放射線利用の仕事に携わる女性の国際ネットワークで、WIN-Japanは日本組織として2000年に設立されました。小川さんはWIN-Japanの発足に尽力され、11年間の活動を支えてこられました。今回の福島第一原子力発電事故は厳しく受け止められたでしょうし、その後は、WIN-Japanのメンバーの皆さんも慌ただしい日々だったでしょうね。

小川 WIN-Japanには、現在、正準会員、賛助会員合わせて約220名いますが、そのうちおおよそ40名が今回の震災と津波で被災しました。会員本人であったり、家族、あるいは会社が被災しており、2週間にわたり出勤できない状況の会員もいました。

また、福島第一原子力発電所事故後は、会員それぞれが身を切られるような気持ちの中で、とても多忙な日々だったと思います。私の場合も

原子力学会の広報情報委員会の委員長の任にあり、通称チーム110という、異常事象解説チームのコーディネーターを兼務していることから、学会員の先生方をメディアに紹介するなど、マスコミ対応などに追われました。

震災直後は、いつもより慎重だったメディアの反応

——福島第一原子力発電所事故後は、原子力発電を巡る政府の対応もちくは

ぐでした。一連の問題の発端となったのが、中部電力浜岡原子力発電所を停める菅総理からの要請でしたね。

小川 あの発言には、びっくりしました。個人的には、根拠の薄いデータを引用した説得力のない要請だったと思います。政治主導を標榜しながらも、原子力を政権延命の手段にしているようにしか思えなかったです。その後も一国の首相が自らの思考で国政を弄んでいるようで、そのパフォーマンスこそ、日本にとって

最大のリスクではないかと感じました。日本の民主主義国家はどこへ? という思いです。

——新聞やテレビの報道を見るにつけ、政府の不甲斐なさに怒りがこみ上げます。

小川 WINで海外に出て、彼我の差を感じるのには、程度の差はありますが、会員たちが、政府を信頼している、一緒に同じ方向を向いて進もうという意思がみえることです。日本は、いま混沌としていて、頼るべきものがない感じですが、トップの思

いつきのな発言が、原子力に対する国民の不安を助長し、国策である原子力利用を促進してきた事業者の経営も難しくしています。原子力発電所が立地する地元自治体も、原子力発電所を動かすべきか否かの判断基準が示されず困惑しています。エネルギー安定供給という根幹が揺さぶられている。まさに国難ですね。

——一部のマスコミも問題です。原子力の推進派を目的の敵にして、ありもしないプライベートまで書き立てているメディアもありますからね。

福島事故を体験した日本の使命



おがわ じゅんこ

1975年3月慶応義塾大学文学部史学科西洋史専攻卒業、同年4月日本ニユクリア・フュエル(株)入社広報部次長、2000年7月同社広報室広報主幹、09年7月同社広報室・副部長、同年10月東京都市大学准教授・女性研究者支援室長、原子力アドバイザー、現在に至る。

2000年からWiN-Japan会長、またWiN-Globalの会長を04年5月～08年5月まで務める。原子力学会理事(06年6月～10年6月)、同学会広報情報委員会委員長(07年～)、文部科学省科学技術・学術審議会委員(10年12月～)。などを務める。05年、原子力広報活動に貢献した女性として世界原子力協会(WNA)大賞を受賞。

小川 でも、少しいつもと違うなとも感じたんですよ。3月の震災発生直後ですが、あまりの大災害に、いろいろなマスコミの方々と接していて、みんなが一つの連帯感でつながっているような感覚をもちました。ここで、筆が走りすぎると日本中がパニックになってしまうのではないかと、マスコミの人たちの不安感が存在したという感じでした。最近、ようやく事故の現場が、収束に向け一定の進捗があり、メディアも平常に戻ってきたのか、いつものように、センセーショナルな報道をするテレビ番組や雑誌が再燃してきました。誤解を恐れずに言えばある程度の煽り報道は、仕方がないのかなとも思います。

WINの組織と活動

WIN (Women in Nuclear) は、原子力・放射線利用の仕事に携わる女性の国際的なネットワーク。原子力平和利用推進の立場から、女性と次世代層を主な対象として原子力理解活動を行うことを目的としている。この目的のために、WIN会員は、原子力発電や放射線利用に関する研究成果、技術向上などについて情報交換し、会員の資質を高めることにより、より高い成果を上げることを目指している。

組織としては、WIN-Globalが1993年にヨーロッパで誕生し、国別組織の代表で構成される理事会を置き、会員7か国約2850名を擁している。WIN-Japanは、WIN-Globalの日本組織として2000年に設立された。会員数は現在、約1500名を数える(準会員、賛助会員を含む)と約200名)。

を煽り、雑誌の売り上げやテレビの視聴率を上げていたとしたら、社会的に許されることではないと思います。

小川 地震・津波では、分かっているだけで1万5千人以上の方が亡くなりました。福島第一原子力の事故について言えば、幸いにして、放射線・放射能が原因で亡くなった人はおられません。命の数でみるのであれば、自然災害である「津波」の危険性は大変大きく、天災ゆえに、人間が立ち向かうことができるものではないのかもしれない。「原子力」は、死亡者こそいませんが、地震、津波以上の社会不安を生んでいます。失われた命の数を考えると、津波は、原子力災害よりも巨大な被害といえますが、心理的には、放射能、放射線の方により大きな不安を感じているのではないのでしょうか。このよう

WIN-Globalでは、原子力・放射線利用について、女性や次世代層を重点対象とした一般国民への理解促進活動の他、原子力・放射線利用分野の女性の能力向上および活用促進を目指す活動を行っている。具体的には、毎年、年次大会を開催し、研究成果、新技術、広報活動、施設見学会などを通じて、情報交換、人脈交流を行っている。また、エネルギー、原子力関連の国際会議において、WINとして論文発表、ポスター参加により、原子力の情報を伝える活動を行っている。

WIN-Japanは、WIN-Globalの精神を受け入れ、日本の国情に合った原子力理解促進活動や会員の資質向上に努めている。とくに、原子力の立地地域で実施する女性交流会は、一般の女性と原子力・放射線利用分野で働くWIN-Japan会員との直接対話による草の根活動である。(WIN-Japanパンフレットより採録)

に、特に放射能、放射線に関しては、目に見えないだけに、不安を煽られます。不安に対する心理は、理屈どおりにはいかなのでしょうか。放射能によって命が失われた実態はなくても、また放射線が直接的な原因で健康被害が出た例が報告されていないにもかかわらず、将来に対する漠然とした不安は拭い去れないのだと思います。

先日、授業で、「みんなの体の中には7000ベクレルくらい、放射能があります。1ベクレルは、毎秒1本の放射線を出す能力ですので、皆さんの体から毎秒7000本の放射線が出ていることになります」と説明しました。すると、工学部の学生でも放射線の知識はさほどないので、吃驚した表情をします。たとえば、100ベクレルの放射性セシウムを摂取したとしても、母数が7000ですから心配するような数値ではあ

りません。しかも、セシウムの生物学的半減期は、新陳代謝や排泄により70日程度です。こういうことから放射線のレベルを知れば、漠然とした不安は解消され、危険や恐怖を煽るマスコミ報道にも右往左往しないで済むと思います。

8割がああ津波を凌いだ事実

——ところで、WIN-Japanとしての活動は、いまどのような状況になっていきますか。

小川 震災後、WIN-Japanとして、統一的な活動をする時間的余裕はまったくありませんでした。毎年、4月中旬に開催している年次大会も、会員が各地から集まれる状況ではなく、6月22日に約2か月延期しました。その間は、会員専用のホームページや電子メールで、互いの安

否を確認し合ったり、電気事業連合会に所属する会員からの最新情報を共有するなどの取り組みを中心にしてきました。

また、ときには、会員同士で励まし合い、あるいは疑問や悩みを解消しあったりもしました。例えば、会員の一人は、「ママ友たち」から問われた放射線への質問と回答を「問答集」にして全会員に電子メールで配信してくれました。各会員は周囲から同様の質問を受けることが多かったので、とても有意義な情報として好評でした。

——6月に開催されたWinJapan年次大会は、震災後に会員が集まる貴重な機会になったと思うのですが、どのような大会になりましたか。

小川 難しい時期での開催ではありましたが、とても感動的なこともあ

のあまり、厳しいことが言えなかった雰囲気があったと思います。ずっと前から、原子力業界は、「原子力村」と揶揄されてきました。私は、人間活動があれば、村ができるのは当たり前だと思っています。「村」を揶揄するマスコミも「マスコミ村」があると思いますよ。マスコミ業界は競争が激しいので、原子力のように底いあい、支え合いというのは少ないかもしれません、「記者クラブ」という誰でも認める特権的組織があるではないですか。「村」というものは良いにつけ悪きにつけ、三疎み的な空気に支配されるものです。仲間よりも秀でてはいけないうし、足を引っ張ってもいけない。槍玉にあげられるのは、そうした暗黙の外からではわからない「秩序」なのでしょうね。——日本という国は、エネルギー資源に恵まれず、電源の選り好みこそ

りました。今大会では特に、電事連さんと、影響が甚大だった東北電力に所属する会員から震災後の対応を講演してもらいました。電事連さんからは、技術に詳しい方から、福島第一原子力発電所の事故の概要を詳細にお話していただき、質疑応答もかなりつつこんだやり取りがありました。東北電力の会員からは、被災した住民の皆さんのために女川原子力発電所の構内の施設を開放した話や発電所施設を津波から守った先輩社員たちの叡智などを話してもらいました。女川原子力発電所建設当時の立地関係者は過去の津波に畏敬の念があったといえます。やはり、自分の管轄地、自分のお客さま、自分の歴史を知っている会社は強いのだと思います。福島第一原子力の事故は残念ですが、一方で、なぜ女川原子力がああ甚大な津波から設備を守

れたのか。私は、安全を確保し得た女川原子力の例をもっと広く社会の人々に知っていただくべきだと思います。あの大震災で、津波の攻撃を凌ぎきった原子力施設の方が多いのです。青森県の東通から茨城県の東海村まで5か所の原子力発電所があった、致命的な事故に見舞われたのは福島第一原子力で、そのほかは、必死に守りきったわけでしょう。どのようにしてそれが可能だったか、きちんと後世に残すべきだと思います。——原子力ルネサンスと言われた時代の空気が一変してしまいましたからね。

う自由にできる国ではありません。そもそも原子力を国策として推進した背景にも、石油危機を教訓とした石油依存からの脱却にあったはずで、資源を持たざる者が、自分たちの叡智でエネルギー問題を克服しようという国家の強い意志がありました。その原点を忘れてはなりませんよ。小川 最近、その原点すら判断が間違っていたという人もいます。かつて原子力推進の発言をしてきた作家や評論家を「戦犯」として吊し上げるような論調を強めている人もいます。ところがその本人もかつては原子力推進派だったと指弾されて「転向」が露わになってしまったりと、

いまの言論界も混沌としています。——人気取りが商売の人たちは、その時々ポピュリズムで発言しているわけですから、真意は差し引いて見なければなりませんね。

小川 国民が原子力利用はもうこりこりだと言うのなら選択の余地はありません。しかし、日本のエネルギー事情の現実を踏まえれば、私は必ず揺り戻しがあると思っています。本格的な将来のエネルギー政策の討論は、福島第一がステップ2までを完了して、住民の方々が、故郷に帰られてからだと思っています。いま、復旧活動の途中で、国民が原子力への冷静な判断ができる状態ではないと思うのです。

世界の仲間の連帯感が身にしみた今年の国際年次大会

WinJapanでは、今年6月に開催されたWinGlobalの年次大会に予定通り出席されましたね。「フクシマ」への関心はどうでしたか。

——海外の会員の皆さんが、当事者意識で福島第一原子力の事故を捉えていたということでしょうか。
小川 福島の事故以降、世界中で原子力コミュニケーションの分野は

今までのストーリーが崩壊したのです。WINはチェルノブイリ後、1993年に創立しましたので、ストーリーも、チェルノブイリ事故もWIN史上では体験していま



世界のWINのメンバー

小川 WIN Globalの年次大会は6月5日からブルガリアで開催されました。3・11以降は、世界中の目が「フクシマ」に注がれていたので、WIN-Japanとして

も福島第一原子力の事故についての説明責任を感じていたので、2時間も特別セッション設けてもらい、報告しました。
できれば、電力会社に所属する会

員自ら報告してもらいたかったので、事故直後のホットな状況ではそれは適わないことでした。そこで、情報を提供してもらい、他の会員が様々なデータを色々ところから収集し、プレゼンテーション資料を作り、国際大会に出席した6名の会員が、事故の内容、避難状況、事故の教訓などの項目を分担して、発表しました。

一方、他の国の発表者たちも、全員が「フクシマ」という単語がシナリオに入っているレポートを報告していました。カントリイレポートにしてもテクニカルレポートにしても「フクシマ」がキーワードに挙がっていたのです。発災から3か月近くが経っていましたが、これほどまでに世界に衝撃を与えたのかと、改めて驚かされ、複雑な思いに深く駆られました。

せん。JCOの事故の場合は、事故レベルはそう高くないということであまり話題になりませんでした。チェルノブイリについては、事故後10年の時に、取り上げられましたが、チェルノブイリ事故は共産圏の国が起こした失敗で、西側諸国では起こりえない重大災害だと思われていました。ところが、今回、西側の日本で、しかも、複数基で事故が起こってしまった。まさに、仲間が引き起こしてしまった不幸なのです。国際社会では優等生の立ち居振る舞いをする日本が、信じられない事故を起こしてしまったという認識です。だから、その日本を世界の国々で支えようという気持ちと、多少は、責任を強く問うような厳しい目もあつたと思います。さりとて、露骨に責めるような発言はありません。年次大会の会場では全員が黙祷を捧げて

くれたし、出席者同士でポケットマネーを集めて寄付もしてくれました。

——温かい心ですね。

小川 私はお礼のスピーチで涙を抑えきれなくなりました。皆さんの心に感謝するとともに、とても悔しかった。何で日本が……と。

「原子力村」に必要な女性 の力

——辛いですね。WinJapanでは、これからどのような活動ができるでしょうか。

小川 今年は、エネルギー問題を考える主役は次世代層だと思っています。いままで散々エネルギーをうまく使ってきた私たちの世代が、次の世代に私たちの選択を押し付ける資格があるでしょうか。ですから、大学生との対話を重視したいと思って

世代層は、男女を問いません。そうしたことから、大学生との対話と併せて、震災で被災された福島県周辺地域の女性たちとも語り合いを持ればと思います。

また、WinJapanが日本各地で開催してきた交流会参加者への意識調査もしたいと考えています。各地で出会った女性の皆さんが、3・11を機会に原子力への考え方がどう変わったのか、あるいは変わらなかったかも知れませんが、それを聞いてみたいのです。原子力に対して後ろ向きになってしまった方々が多いでしょう。そうした皆様に再び原子力のほうを振り向いてもらうのも至難です。Winの会員にしても、原子力に対する考え方が変わった人がいるかもしれません。現在のところ、脱会を申し出ている人はいませんが、脱会の意思があってもそれを

います。世代間の公平を考えることは大切だし、とくに、これからの若い人たちは、世界でもまれに見る高齢社会の日本を支えていかなければならないのです。エネルギー問題を本当に自分の問題として考えられるのは、若い世代ではないかと思いません。

エネルギーを使わないことは、「偉い」とか「美しい」とか「使命だ」という価値観とは必ずしも直結しません。次の世代は、理想とする生活を自分たち自身で選択して構わないはずで、その彼らに、「エネルギー不足」を生きる条件として押しつけるべきではありません。さらに言えば、その重要な選択肢の一つである原子力を「止める」という形で後世に託すべきではありません。少なくとも、原子力技術の基本は残してあげるべきです。

否定しません。私自身は、いままで申し上げましたように、原子力や放射線利用技術の必要性を従来通り認識しており、これからも理解促進への活動を続けてまいります。

しかし、活動の難しさは覚悟しています。いま一番の願いは、福島第一原子力の事故収束が工程表どおりに進んでいくことです。事故が収束して何年後か、話を冷静に聞いてもらえる空気になってくれたとしたら、嬉しいです。その間、私の場合は、原子力の話を真っ正面からするのではなく、日本のエネルギー政策を考える際の重要な論点を提示することが活動のメインになっていくと捉えています。

——使命感を持って、強い気持ちで臨んでいかなくてはなりませんね。
小川 エネルギーの技術分野では、今後は女性の力がさらに必要です。

日本の使命は、福島第一原子力の事故を体験した国として、それを克服する技術を世界に提供することです。具体的な提案ができなくても、一緒に考えるための基礎となる事実を伝える義務があると思います。それが日本の技術者魂であり、技術者倫理であり、礼儀であります。怖いもの、難しいものから逃げることは誰でもできます。困難に立ち向かい、世界に、日本人としての誇りを示したいではありませんか。フクシマの事故を克服した民族だと訴えたいではありませんか。

——大賛成です。エネルギーの確保は国の礎であって、それをどう選択するかは国柄に直結することです。大学生との対話はとても有意義ですね。

小川 Winの相互理解の対象は、全世代の女性と、次世代層です。次男性ばかりだと、コミュニケーションよりも面子が先に立って、「村」の弊害がより強く出てくるような気がします。身の周りの男女の行動形態を見てもわかると思いますが、女性はコミュニケーションによって、ものごとをスムーズに運んでいく術に長けていると思います。女性の仲間の中では、学歴よりも人柄、理論よりもフットワークの良さなど、ひと本来の力がものをいうことが多いです。

私は「村」を否定しません。人間の集団には、日本だけでなく欧米社会でも「村」は存在します。ただし、これまでの「原子力村」は特殊でした。まず、第一に女性の「住人」が殆どいませんよね。やはり「村」に、育て育む性である女性がいなくては、集団としてはいびつです。——それも同感です。